

金子氏には、大正生命主義研究の端緒をひらいたころより、科学史家として協力と貴重な助言をいただき、また日文研の共同研究にも熱心に足を運ばれ、成果報告書にも必ず力作をよせていただいている。それに加えて、このたびは、後輩の仕事に積極的に書評の労をとってくださったこと、まことに感謝の念にたえない。そして、これだけ大部の本を短期間で読んでくださり、過褒なことばをいただいたこと、しかも字数の制限された枠内で、研究の将来に向けての建設的なご意見をいただいたことに深く感謝したい。

過褒というのは、「『いわば生命観の歴史的・地理的なマップ』を描くという野心作」と評していただいたこと、その課題に対して、わたしの姿勢が謙虚であると述べておられることである。これは、買いかぶりというべきものだ。そして、この買いかぶりが氏の感想にも響いており、また、それが読者に誤解を招くかもしれないので、ここにいささか弁明させていただくことにした。

いかにも、わたしは「いわば生命観の歴史的・地理的なマップ」ということばを書いている。しかし、そんなことはわたし一人の力でできるはずがない、とも書いている。それは謙遜しているのではなく、あまりに自明なことである。それゆえ、わたしは、本書で大正生命主義を二〇世紀の国際的な生命主義の潮流のなかで相対化し、そして、二〇世紀の生命主義の流れを、あまたの生命観のなかで相対化するという目的にそって作業を行った。今度の『生命観の探究』は、この目的からくる限界を最初から背負っていることをおことわりしておかなくてはならない。

書評五段目の最後のあたりから、わたしが提唱していることとして、神の問題を抜いた場合の「目的論と機械論、還元主義と全体論という二軸四極」図式を紹介し、それに対する評者の意見が書かれていることについて。まず、この図式は、生氣論 対 機械論という二項対立図式が、今日、依然として、国際的な百科事典にも、生物学の現場でも支配的なことに対して、それを解体再編するものとして提案したものであり、しかも、二〇世紀への転換期より意識の哲学が興ってくると、この図式は効かなくなるということも明記してある。評者は、このあたり読み急がれたようだ。

そして、この図式を「地図」として読んでおられるが、これはあくまでも分析のためのスキームである。神の関係を度外視したとしても、あまたの生物学説が、この二軸がつくる四象元のどこかにおさめられるというものではない。これとは別にわたしは、明治期文化の分析スキームとして、「西洋化」と「伝統創出」、「近代化」と「反近代化」の二軸四極図式を提起しているが、そこではロマンティズムによる伝統文芸の改良運動が、それがつくる四象元のどこにもおさまらないということを明記している。

評者が提出しておられる「直覚知」か「分析知」かという問題は、さらに、もうひとつ別次元の二項対立軸を設定すべきだという提案として受けとめるべきことだ。ただし、「分

析知」に「直覚知」が対置されるようになるのは、二〇世紀への転換期に「意識の哲学」が浮上し、観察主体 対 対象という近代的な二項対立を超えようとする動きが起こってからのことだと思うが、どうだろうか。

評者は、二軸四極図式が効かない、もうひとつの例として、マービン・ミンスキーの生命観をあげておられる。人工知能学者の立場はシステム論であり、また世界の目的論ではなく、機械の目的論であることは、本書第一二章で、サイバネティックスから情報理論、そして、システム論を扱ったところで述べてある。そして、そのあと、生物の合目的性論について論じたところで、世界の目的論、すなわち大きな目的論と、生物の合目的性、すなわち小さな目的論とを切り分けて整理しなおしてあるが、これがデカルトの動物 機械論に対するカンギレムによる批判、および人工知能学者の機械の目的論と生物 機械論の類縁性のふたつを手がかりにしていることは見えやすいことではないだろうか。

次に七段目のおわりから、DNA 中心主義ではない、もうひとつの流れとして評者が「ゲーテ的生命観」の系譜を提出しておられることについて。わたしは、これまでのゲーテ評価に対して、受容史、評価史がドイツ本国で鋭く問われてきたことは承知しているつもりだが、ゲーテの生命観の多彩さをうまくまとめられないでいる。また、日本におけるゲーテ受容については、ほとんどお手上げ状態だということも率直に書いておいたはずだ。ただし、ジンメル『カントとゲエテ』は、ゲーテを「自然の生命」論者にまつりあげており、二〇世紀日本のゲーテ受容は、その影響下になされたのではないかということを示唆しておいたつもりである(160 161 頁)。つまりゲーテの自然観=生命観も生命主義の流れに一役買っているということである。

そして、評者が「ゲーテ的生命観」が西田哲学の読み説きのキーワードになるということについて述べておられることについては、ゲーテを論じなくても、ドイツ観念論のはらむ「自然の生命」の系譜を参照すれば、それで十分であろうと考えている。次に述べておられる西田哲学と鈴木大拙の禅思想は表裏することに異論はないが、「大拙を経由してはじめて自力、他力論ともに理解できる」のあたりはわたしには疑問で、本書では、そのあたりについて、清沢満之の思想遍歴および、その影響から解いているつもりである。鈴木大拙の書物は欧米における禅宗理解に多大な役割を果たしてきたし、いまでも、そうかもしれないが、『日本的靈性』の日本精神史への影響となると、わたしは金子氏とは見解を異にする。ついでに本書で平田篤胤にかなり力を注いだのは、筧克彦の生命主義国家神道論との関係があってのことだということをお断りしておきたい。くりかえすが、わたしは生命観についての百科全書をつくらうとしたのではなく、あくまでも二〇世紀の生命主義の展開をあきらかにし、それを相対化するために、必要となる作業を積み重ねているのである。

続いて評者は「生命の根底にある『無意識』の視点が薄いのも気になる」と述べておられるが、「生命」や「生命観」の底には「無意識」の領域があるというのは、生命観のひとつの系譜である。その系譜をシェリング、ショーペンハウアー、カール・R・E・フォ

ン・ハルトマン、フランツ・ブレンターノ、ジグムント・フロイト、カール・ユングとたどり、芸術のところではシュルレアリスムのアンドレ・ブルトンらに言及しておいた。

もちろん、それも生命主義の世界観との関係においてのことで、枝葉として扱っているわけではない。なお、森鷗外ではなく、夏目漱石の小説世界にハルトマンの無意識の哲学が影を投げているのではないかという推測は、わたしのかねてからのものだが、そのようなことを書いたのは、本書がはじめてである。

というわけで、全体として評者は、本書に「生命観の歴史的・地理的なマップ」を期待し、それぞれの生命観の叙述にかけられている比重などに対して、違和感を覚えたところを指摘なさっていることになろう。その違和感は、ひとつには、わたしの本書での目論見に対する買いかぶりによるものであり、また生命観に対する見解のちがいが生みだしているところもあるようだ。

だが、そのようなものが要請されている時代だという認識は、わたしも共有している。それこそ各界の総力をあげて、生命観に関する百科全書的な講座ものを企画すべきではないだろうか。(了)